

否定過去の助動詞「なんだ」に関する一考察

京, 健治
岡山大学大学院社会文化科学研究科助教授

<https://doi.org/10.15017/8934>

出版情報：語文研究. 96, pp.1-12, 2003-12-26. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



否定過去の助動詞「なんだ」に関する一考察

京 健 治

1. はじめに

現代語に於いて打消過去の表現は、「昨日は学校に行かなかった。」のように「動詞未然形+な^{注1}かった」の形で行われる。この「な^{注1}かった」は天保年間（1830～1844年）頃に現れるという。

けふはなぜ久しく屋敷へは出ななかつたか （楠下埜夢）

どふもまた芸を磨いたものばかり、みがゝねへじやアならななかつたそうだから （春色辰巳園・二）

私きやア其意味にやアさつぱり気が付かなかつたヨ （春告鳥・二）

さて、この「な^{注1}かった」の形が行われる以前に於いては以下に示す助動詞「なんだ」が打消過去の表現に与っていた。

夜は蚊が食ふ、明日と、逃げんとすれば 引留め、気がつかなんだ。蚊が食はう、蚊帳へおぢやと抱入るゝ （薩摩歌）

余所の笠とかはつて、詮議しても知れなんだ。 （五十年忌歌念仏）

小まん、この中逢はなんだ。無事で嬉しい。 （丹波与作待夜の小屋節）

おれが親仁はな、一年に八千両、九千両づゝ、三十年使はれたれども、つひに浮名は立たなんだ。 （淀鯉出世滝徳）

否定過去の助動詞「なんだ」に関わる問題については、「ナンダ」から「ナカツタ」へと移行するのはいつ頃かなど、その変遷過程についてはこれまでも詳しい考察が為されてきた。しかしながら、助動詞「なんだ」が如何にして成立を見たのかという成立事情等についてはいまだ十分な考察が行われてきたとは言いがたいように思われる。

たとえば、『日本語文法大辞典』・「なんだ」の語誌に<語源については、「ぬなりたり」「ぬな^{注1}った」「んな^{注1}った」「んな^{注1}んだ」「つな^{注1}んだ」「な^{注1}んだ」、「ざ^{注1}った」の転音、打消の「なん」に過去の付いた連語など諸説あるが、未詳。>とあるようにその来源は未だ明らかとはなっていないようである。

後述するように助動詞「なんだ」の活用形のあり方には考えうべき点が残さ

れているように思われる。

そこで本稿では助動詞「なんだ」が如何にして成立を見たのか、その成立の経緯について少しばかり考察を加えてみることにしたい。

2. 「なんだ」の用法に関する問題点

『日本文法大辞典』の「なんだ」の項について、当該箇所¹に挙げられている用例を引用する。

[未然形] 何故うち明けて一言でも言ツて聞かせて呉れましなんだらう
(いろは文庫・68)

[連用形] 最前から色々の物かせといへども、かさなんでござる程に
(虎明本・鍋八撥)

物しつたり物しらなんだり、物しり物しらずサ (浮世床・初中)

[終止形] 御次に居まして御座るが、御声を承りませなんだ (虎寛本・武悪)

[連体形] これほど面白いことを、今までしらなんだが、残念 (浮世床・初中)

[已然形] 死んだごとくに動かなんだれば、そこを退いた。

(天草版伊曾保・471・1)

助動詞「なんだ」の来歴については未だ不明な点が多いようであるが、その意味用法である 否定過去 からすれば過去の助動詞「た(り)」を語構成に持つことは間違いないであろう。そのように捉えるとすると、用法の面で若干問題となりそうな事象があるように思う。

最前から色々の物かせといへども、かさなんでござる程に

(虎明本・鍋八撥)

のような「て形」の「ナンデ」が如何なる経緯によって成立したのかということが問題となりそうに思う。また、同じく連用形に記載される「ナンダリ」の意味用法をみるに、これはその意味からすると、現代語にいうところの「物を知っていたり物を知らなかったり」という並立助詞の用法に相当するように思われる。

物しつたり物しらなんだり、物しり物しらずサ (浮世床・初中)

先の「ナンダリ」は「動詞+なかつたり」が成立する以前に於ける並列表現形式として注目されるものと思われるが、これまでのところ、こうした用法の史的な位置付け等についての考察はあまり行われていなかったのではないかとと思われる。

以上見てきたように助動詞「なんだ」の活用形についてはなお検討すべき課

題が少なくないように思われるのである。

3. 「なんだ」の使用状況

助動詞「なんだ」は中世後期以降、従来のザリ系による表現形式に代わり、一般的に行われるようになる。

いま、『天草版伊曾保物語』及び『天草版平家物語』に於ける「なんだ」の使用状況を以下に示そう。

『天草版伊曾保物語』の「なんだ」は終止形9例、連体形13例、已然形5例が見える。

終止形

色香も一段ようて見事にあつたによって、喜び斜ならなんだ。(410・7)

エソボもまた官・位に進むことも斜ならなんだ。(432・21)

されども、一円同心せなんだ。(481・5)

吠え立てられて、え入らなんだ。(484・22)

皆その悲しみを改めなんだ。(488・22)

戸の叩き様は狼ぞ」と言うて、ちっとも開けなんだ。(489・12)

子ども我も我もと力を尽くいて折ってみれども、少しも叶はなんだ。
(491・24)

その中に狐ばかり見えなんだ。(502・8)

少しも暇を得なんだによって、何たる営みもせなんだ」と言ふ。(465・18)

連体形

それを受け取ってから、何ともそれは言はなんだか」と問はるれば、
(421・17)

吐却すれども、痰より外は別に吐き出さなんだところで、(411・20)

臥しどを去らなんだところで、(501・3)

足に掛かって飛ぶことを得なんだところを、(490・8)

かやうに籠者せられうことを弁へなんだによって(416・23)

エソボはまだ子孫を持たなんだによって、(432・22)

獣も多いといへども、かねて評議をせなんだによって、(461・18)

少しも暇を得なんだによって、何たる営みもせなんだ」と言ふ。(465・18)

その主折節他行して、居なんだによって、(483・3)

あるいは度々食ひ止めなんだによって、鞭をあつれば、(485・18)

蛇情強にして、少しも聞き入れなんだによって、(495・17)

「わが身のためには逃げなんだものを」と、その時悟ったれども、
(482・19)

人ごとに躓き倒るれども、顧みなんだを、
(417・14)
已然形

実否をいまだ決しさせられなんだれば、
(433・8)

この島の人悪逆無道にして、善悪も聞き入れなんだれば、
(441・20)

ある鷲、過牛を見付けて、くらはうとすれども、叶はなんだれば、
(449・18)

死んだごとくに動かなんだれば、そこを退いた。
(471・1)

鶏の声も聞こえなんだれば、獅子王たちまち取って返いて、
(482・16)

『天草版伊曾保物語』

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	計
なんたら	なんで なんだり	なんだ	なんだ	なんだれ		
0	0 0	9	13	5	0	27

『天草版平家』では終止形68例、連体形46例、已然形36例、連用形が1例となっており、イソホと同様の様相を呈しているが、「ナンデ」の形が1例見られる。以下にいくつか示す。

今度は何と思はれてござるか、つひにかうとも知らせられなんでござる。
(118・4)

平家の悪いことどもをたとひ目に見、心に知れども、ことばにあらはれてはえ申さなんだ。
(12・13)

北の方はこのごろはこれ程に情けなからう人とは思はなんだと言うて、
(187・3)

なぜに重盛に夢ほどなりとも知らせなんだぞ？
(17・18)

昔はあの人々に訪はれうとはつゆも思ひよりませなんだことをとあつてお涙にむせばせらるれば、
(399・13)

人は見つけなんだれども、子どもの首をばみなたづね出いた。(136・14)

ただもの悲しういつ帰らうとも知れなんだれば、心細さは限りがなかったと、聞こえまらした。
(195・6)

『天草版平家』

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	計
なんたら	なんで なんたり	なんだ	なんだ	なんだれ		
0	1 0	68	46	36	0	151

4. 「なんだ」の成立過程

前節ではキリシタン資料に於ける助動詞「なんだ」の使用状況を見たが、終止形・連体形使用の割合が高いといえよう。

『史記抄』の「なんだ」について調査したところ、「ナンダ」及び「ナンダシ」が見える。

秦王八終二殺ハセラレナンタハ秦王モ我父ト知ラレタケル歟 (四・9ウ)

何語ヲシタトモキコエナンタカ (四・12ウ)

坐敷テモアレカワラナンタソ (五・6ウ)

其カラヤミツイテ一年アマルナヨリエナンタソ (六・69オ)

韓ヲ八諸侯モヲカサナンタソ (十・18オ)

儒者ノ堯舜ノ時ハサハサウナンタナント、云様ニハナイソ (十九・11オ)
のように「ナンダ」があるが、以下に示すようにキリシタン資料では見出せない「ナンダシ」も見られる。

沛ノ中テ豊ハカリヲ復セラレナンタシモノソ (六・8オ)

沈メタレトモ後悔セナンタシソ (十一・47オ)

この「ナンダシ」の「タシ」はその語構成からすれば、助動詞「たり」+過去の助動詞「き」の連体形「し」である。

「～タシ」は本来的に見れば「たり」+「し」の二語であるが、この時代、「たし(たりし)」は一語的な助動詞という性格になっており、その意味も過去時制を表しているようである。

助動詞をいくつか重ねた形の表現は、時の助動詞で言えば、「たける」「たし(たつし)となることもある」という形が見られる。それぞれ、「たりける」「たりし」から転じたものあることは明らかである。この続き方が、この時期(=鎌倉室町時代...京注)における特異なものとも言えないのであるが、ただ、この形が一語の助動詞的な使い方によって変わって来ている点に注意しておきたい。(岩波講座日本語文法)

古典語において過去完了の表現には助動詞「き」「けり」「つ」「ぬ」「たり」

「り」がこれに与っていたが、室町期以降では「た」が一手に担うようになる。かかる推移の途次、「たし」「たける」の形も行われていた。

「ナンダ」はこうした過去・完了表現形式の歴史的趨勢にあって、「たし（たりし）」から「た」へと推移したのと連動し、「ナンダシ（ナンダリシ）」から「ナンダ」が生まれたのではないと思われる。

そのように見てくると、以下に示す「ナムシ」も注意される。

一日ニ二度参ズル日八候シカドモ、不参ノ日八候ワナムシニ、今日都ヲ罷
出テ候テ、西鎮ノ旅泊ニタゞヨヒ、
(延慶本平家物語・三末)

山内洋一郎氏『中世語論考』に、否定過去に与かっていると思しき「ナムシ」について、<室町時代の「ナンダ」「ナンツ」と同じ構造と考えられ、唯一例ながら重要な例である。>の指摘がある。

「ナンダリシ」「ナンダ」が見え、さらに中世前期に「ナムシ」も見える。こうした語形のあり方からすると、過去・完了表現形式の推移に準ずるような形で「ナムシ」「ナンダリシ」「ナンダ」という変遷過程を経て成立したものではないかと思われる。

『史記抄』において、「ナンダシ」「ナンダ」の二形が見られるが、これは「ナンダシ」から転じた「ナンダ」との併用の段階を示しているのではないかと思われる。

『史記抄』において、「ナンダシ」「ナンダ」の二形が見られるが、これは「ナンダシ」から転じた「ナンダ」との併用の段階を示しているのではないかと思われる。

さて、助動詞「なんだ」の活用には後世、「ナンダレ」「ナンダラ」等が見られるようになるが、これらは終止連体形の「ナンダ」の形をもって、助動詞「た」の活用に倣うかのように再活用によって成立したものと思われる。

以上、「なんだ」の使用状況の推移を手がかりに「なんだ」が如何にして成立したのかを考えてきたのであるが、「なんだ」の用法には第3節に示したように、テ形「ナンデ」も見られるようになっており、また、近世期以降には並列助詞的用法と思しき「ナンダリ」も見られるようになっており、かかる語形が如何にして生ずるに至ったのであろうか。以下、この問題について考えていくことにしよう。

5. テ形「ナンデ」成立の経緯

ここではまず、テ形「ナンデ」の成立について考えることにする。

「ナンデ」の用法を改めて見なしてみると、「ナンデゴザル」というように丁寧表現「ゴザル」と共起している。『天草版平家』には1例があるが、「ナンデゴザル」の形である。

今度は何と思はれてござるか、つひにかうとも知らせられなんでござる。

(天草版平家物語 118・4)

『虎明本』には9例見られるが、いずれも「ナンデゴザル」の形である。

最前から色々の物かせといへども、かさなんでござる程に、(なべやつばち)
是へ召し出されうとは思ひもよらなんでござるよ (二人袴)

今までかみなり殿のれうじのいたしやうをならはなんで御ざる、(かみなり)

いまは何共おぼへなんで御ざる、(ぬげがら)

して何事にもあはせられなんでござるか (しみづ)

さてへめでたひ事で御ざる、さて何共仰られなんでござるか (つりばり)

隙を糸まひらせひで、おもまひをも申さなんでござる (びくさだ)

師匠のぞんぜられなんだか、今までもしきやうはならはなんで御ざるよ
(腹不立)

慮外で御ざると存て、糸申さなんでござる (どぶかつちり)

『狂言記正編』でも同様に8例すべてが「ナンデゴザル」である。

なにやら。たらぬと申て。はつてくれませなんで御さる (ひめのり)

さてもへ。し水に。鬼のあると事は。ぞんぜなんで御ざる。 (抜殻)

どんになりまするか。ぞんじませなんで御さる (鈍根草)

かみへもしもへも。よりませなんで御さる (相合袴)

あわた口屋をば。とわなんで御さるが。なにといたさうぞ。 (粟田口)

昨病を。おこそおつて。共にうせなんで御さる (二人大名)

はあ。ぞんじませなんで御さる。 (羯鼓炮碌)

札がどこに。あがつてご御さるも。ぞんじなんで御さる (羯鼓炮碌)

また、次例は「(テ)ゴザル」ではないが「(テ)候」の如き存在表現となっている。

唐ノ代ニ八鯉魚ヲ殺サナンテ候ソ (蒙求抄・1・序3ウ)

否定過去表現形式の推移を見るに近世期以降には「マス(ル)」の発達により、

某はききませなんだが、そなたの名は何と申ぞ (虎明本「腹不立」)

のような「マセナンダ」の形も行われるようになる。

丁寧の助動詞「マス(ル)」が一般的になる以前に於いて、丁寧表現は「～て候」「～てゴザル」の形で行われていた。

我はこの謂を弁へてござる。(天草版伊曾保物語・19・12)

さほどのこととも存ぜいで、この比は無音本意を背いてござる。

(天草版伊曾保物語・502・18)

常体表現形式「ナンダ」を丁寧表現形式に行おうとした際、「マス(ル)」が一般的となる以前では「ナンデゴザル」のような「テ+丁寧表現」の形しか取りようがなかった。そうした丁寧表現のあり方をもとに「ナンデ候」「ナンデござる」という丁寧表現形式が行われるようになったのであろう。「ナンデ」というテ形の成立はこうした事情によるものと思われる。

6. 近世期に見える「ナンダリ」

前節では助動詞「なんだ」の用法のひとつであるテ形「ナンデ」成立の経緯について考察したが、「なんだ」の用法に関しては近世期以降に見える「ナンダリ」の性格についても検討すべき余地がありそうである。

「ナンダリ」という形は筆者の調査した限りでは近世期以降の文献に見出されるものであり、その用法も並列助詞的用法に使用されている。

「ふりみふらずの心で、あびたりあびなんだり、かけたりかけなんだりさ」

(浮世床)

「へりふんだりふまなんだりぢやアねへか」

(浮世床)

はじめのうちは実めかして如在のねへ客のやうたがしめへの太平楽が心ほどにやア口がまはらなんだりするからうつぜ

(後編姫意妃)

これらは打消過去の意味を有しているというよりは動作の並列を示しているものと解されよう。例えば、「あびたりあびなんだり」は「あびたりあびなかつたり」、「口がまはらなんだりする」は「口がまわらなかつたりする」という意味に用いられているのである。

「なんだ」の活用は「なんだら/なんだり・なんで/なんだ/なんだ・なんだる/なんだれ/」に見るように助動詞「た(り)」にほぼ準じて捉えられることから、「ナンダラ」「ナンダレ」の形から「ナンダリ」という語形が生じたことを見ることもできそうであるが、この「ナンダリ」は過去の意は有していない。

並列助詞的用法の「ナンダリ」の性格についてはなお検討の余地があるが、この「ナンダリ」の成立に関して注目したいのは次に示す「ナンヅ」である。

星カミヘツ、ミヘナンツシテ稀ナルソ

(四河入海・9ノ1・10ウ)

この「星カミヘツ、ミヘナンツシテ」は現代語でいう「星が見えたり、見えなかつたりして」の意味であり、先の「ナンダリ」と同様の意味用法に使用さ

れている。

「ナンドリ」の形は近世期以降見いだされるものであった。かかる語形の成立については「ナンド」からの再活用により、「ナンドラ」「ナンドレ」と同様に成立したと見るよりは、むしろ「ナンツ」との関係のみたほうがよいのではなからうか。

「ナンドリ」「ナンツ」の関係は並立助詞「つ」「たり」と並行的に捉えられよう。

踏んづ：踏んだり = 踏まなんづ：踏まなんだり

「ナンドリ」という形の性格についてはこれと同様の意味用法を示している「ナンツ」との関連を考えた方がよさそうであるが、この「ナンツ」「ナンドリ」の形が生まれたのは如何なる事情によるものであろうか。

「ナンツ」の性格について、此島正年氏は<「なん」に完了の「つ」の並立助詞化したものがついた>のものであろうとの見解を示されている。「ナンツ」の意味用法から見て、「づ」は並立助詞「つ」であるとみてよいが、この「ナンツ」の形の成立には否定過去表現形式がザリ系「ザッタ」から「ナンド」へと移行するという史的变化が深く関わっていたものと思われる。

否定過去表現形式には助動詞「なんだ」は室町期以降一般的になるが、それ以前にはザリ系「ザッタ」がこれに与っていた。

ミエザツタナリ (詩学大成抄・一53オ5)

ワルウテキサツタソ (詩学大成抄・二82オ2)

また、並列表現形式の場合も「～ザリツ」の形で行われていたようである。

明滅ト云八見ツ見ヘサリツスルヲ云ソ (四河入海・17ノ1・43ウ)

否定過去表現形式がザリ系「ザッタ」から「ナンド」へ移行するに伴い、「見えなかつたり(する)」という並列表現形式も「ザリツ」から「ナンツ」「ナンドリ」へ移行したのではないかと思われる。

7. 助動詞「なんだ」の来源

前節までに於いて、否定過去の助動詞「なんだ」の成立過程について、その活用形・用法を踏まえながら考察してきたのであるが、最後に否定の意味<なん>の性格についての検討が残された。

湯澤幸吉郎氏『室町時代の言語研究』(p206)に 打消の意は「なん」にあることは推測しうる。、此島正年氏『国語助動詞の研究』(p165)「なんだ」の「だ」が助動詞の「た」であることはまちがいないが、「なん」の正体がはっ

きりしない。といった記述に見られるように「なん」が如何なる性格のものかという点についてはなお不明な点が多い。なお、「なんだ」の来源に関して、
会津嶺の国をさ遠み逢はなは<奈波>ばしのひにせもと紐結ばさね

(万葉集・3445)

水久君野の鴨の這ほのす児ろが上に言をろはへていまだ寝なふ<奈布>も
(万葉集・3546)

昼解けば解けなへ<奈敷>紐の我がせなに相寄るとかも夜解けやすけ
(万葉集・3503)

栲衾白山風の寝なへ<奈敷>どもころがおそきのあるこそ良しも
(万葉集・3530)

のような万葉時代の東国方言「なふ」の連用形「なひ」との関連も説かれてきたが、この「なひ」自体が文献上確認されておらず、あくまでも推定の域にとどまっていることに問題が残るであろう。

ところで、『日本国語大辞典』第二版【なんだ】の語誌に以下のような記述がある。

「ぬ」の過去形に相当し、打消の「ぬ」及び過去・完了の「た(たり)」を構成要素とすることは確実であるが、「なんだ」の語形の成立については、諸説あるものの明らかでない。「ぬあったからの変化とみるのが最も妥当かと思われるが、「なった」という促音形から「なんだ」という撥音形に転じるのは、音韻変化としては不自然である。そのため、「なんだ」は、「否定+過去」という連続の不自然さを解消すべく作り出された語形かとみる見解も出されている。

ここに指摘されるように「なんだ」の有する<否定+過去>という意味からすると、「ぬ」+{「あり」+「た(り)」}という語構成を想定したほうがよさそうに思われる。すなわち、「ナンダ」は「ぬあった」「なった」「なんだ」という変遷過程が想定されるかと思われる。

「なんだ」の意味用法との関係から見れば、その語構成は「ぬ+あった」の熟合形によるのではないかと思われるし、抄物資料には否定過去の意味を有する「ナツタ」という語形もみられる。例えば、柳田征司氏『詩学大成抄の国語学的研究』(p392)には『玉塵抄』に「ナンダ」とともに「ナツタ」という語も見えとの指摘がある。

ソノ郡ノ氏・姓ノ人・数ニイレナツタソ (玉塵抄・5・7ウ)

トチエイタヤラミエナツタソ (同・35・28オ)

主人客人ノ礼儀ナサナツタソ (同・36・52才)

左傳ノ談-義ニソレマデハイワレナツタソ (同・7・19ウ)

また、出雲朝子氏『玉塵抄を中心とした室町時代語の研究』(p94)は『玉塵抄』の国会図書館本と叡山本とに於ける「ナツタ」と「ナンダ」との異同について、<(国会本の)「ナツタ」を叡山本で「ナンダ」にしている場合がある>と指摘する。

エトリカエラレナツタソ (国会本・48・3ウ)

エトリカエラレナンタソ (叡山本・48・5才)

以上のように「ナンダ」と同様に否定過去を表す「ナツタ」が見られ、かつ「ナツタ」と「ナンダ」との間に異同がみられるという事例等を考慮すれば、「ナンダ」という語形の成立にこの「ナツタ」との関係を見ることができそうである。

以上のことから「ナンダ」は「ぬ+あった」の熟合形ではないかと思うが、音変化のあり方からすれば、「ヌアツタ」から「ナツタ」へとまず転じたであろうと思われる。その「ナツタ」から「ナンダ」へとさらに転じたということになりそうであるが、「ナツタ」という促音形から「ナンダ」という撥音形に転じたとするには、『日国大』の記述にもあるようにその音変化という点で問題が残る。この点についてはいまのところ十分な見解は持ち合わせておらず、今後の検討課題としておくが、これを考えるにあたって、若干気になる点もあるので触れておきたい。

『日国大』【なった】の項に<「なった」と第三拍が濁音になった例もある>とし、以下の例が示されている。

涉が陳えきて陳の王になれと云たに同心せなつたぞ (玉塵抄・14)

[『日本国語大辞典』(第2版)からの引用]

撥音形「ナンダ」の成立を考えるにあたっては「ナツタ」「ナツダ」「ナンダ」の3者の関係をもう少し見ることにより、その解決の手がかりが得られるのではないと思われる。この問題についてはなおよく考えてみたい。

8. おわりに

以上、本稿では、否定過去の助動詞「なんだ」の成立に関して、この語の活用形のあり方をもとに考察を行った。残された課題は多いが、それらについては今後の課題としておきたい。

注

- 注 1 否定の助動詞「ない」の成立及び展開に関しては拙稿「否定の助動詞『ない』の
来源再考」（『島大國文』30号・2003年）にて私見を述べた。
- 注 2 助動詞「ない」に承接する例については金沢裕之氏「『なかつた』新考」（『国語
学』196集）に以下の例が示されている。
誠に旦那が、居たり居なかつたりするので、（春色江戸紫・1864年）
- 注 3 「タリシ」が過去を示すことと関連する記述を引用する。
これに関連して、次のような例を指摘しておく。それは、『平家物語』で、「覚
一本」と「流布本」とは類似した本文を有するのであるが、時々、次のような差
が見られる点である。
[覚一本] 是に都より流され給ひし丹波少将殿（巻二「足摺」）
[流布本] これに都より流され給ひたりし平判官康頼入道（同右）
（『岩波講座日本語 7 文法』助動詞（2））
- 注 4 現行の辞典類に連用形の例として、並列助詞的用法「なんだり」が記載されてい
るが、ここで述べたような成立の経緯を踏まえると、連用形として記載するのは
再考の余地があらうと思われる。
- 注 5 「なんだ」の来源に関する諸説及び問題点については、吉田金彦氏『現代語助動
詞の史的研究』に整理されている。

（きょう けんじ・岡山大学文学部助教授）